

(2017年5月29日講演)

10. 「北朝鮮の核兵器・弾道ミサイル問題の地政学リスク」

防衛大学校 教授 神谷万丈委員

今日は安全保障の専門家という立場から見て北朝鮮の核弾道ミサイル問題にどのようなリスクが日本にとってあるのかという話をしたいと思う。

最初に、私が（この問題に関わる）今日の情勢をどう見ているか一言で言うならば、あまり騒がないほうがよいと、ただし従来よりは騒ぐ理由はだいぶ出てきていると、そのようなところではないかと思う。北朝鮮の核兵器と弾道ミサイルは一体なぜ我々にとって脅威なのか。この場合、我々というのは日本だけではなく、アメリカ、日本、韓国等と考えてもらいたい。北朝鮮が核兵器やミサイルを進歩させ、実戦配備すると言っているようであるが、何百発も持つには金が掛かるので本当にできるのかどうか極めて怪しいと思うが、実戦配備をすると北朝鮮がアメリカ・韓国側との戦争に勝てるようになるということでは全くない。戦争になれば北朝鮮は必ず「死ぬ」わけである。それも恐らく何週間という期間で「死ぬ」。過去 20 年ぐらいの間に何度か、アメリカや韓国あるいは自衛隊の将官級の人に、もし戦争になったら一体どれぐらい掛かるのだろうかという質問をしたことがあるが、長くて数週間で北朝鮮はなくなると自信を持って断言していた。ただ、問題は、北朝鮮が静かに「死んで」くれるとは限らない。これに尽きるわけである。

これは飛び道具と大量破壊兵器時代の戦争の特徴だと私は言っているのだが、要するに負けた者も勝った者に対して、勝った者が避けたいと思うような苦痛を与えることができる時代になってしまった。戦争において、昔は勝てばほとんど苦痛を覚えることはなかった。負けた側は悔しくても何もできない。旧日本軍も悔しかったと思うが、アメリカに対して特攻隊のほかは風船爆弾と、1機だけでオレゴン州かどこかに空襲に行った人と、あとは竹やり攻撃の練習を国民にさせるぐらいのことしかできなかった。だから、過去においては国家間で交渉していて、外交という平和的な手段ではもう目的は達成できないと判断されたら、特に強い国は、安易には言わないが、必要があれば戦争に訴えることが実際にできたわけであるが、今や負けた側が勝った側に非常に嫌なことをする可能性が出てきてしまっているために、この状況が大きく変化している。これは別に私のオリジナルのアイデアはなくて、1960年代にアメリカのトーマス・シェリングというゲーム論を応用して戦略を研究してノーベル経済学賞を取った経済学者が言っていたことである。要するに、軍事力というのは伝統的に戦争に勝つための道具だと考えられてきた。軍人は今でももちろんそう思っている。ところが、実際には戦後になると、シェリングは核兵器によってと言うが、私は核よりも飛び道具の発達、特にミサイルだと思っているが、戦争の勝ち負けとは関係なく敵に苦痛を与えるという非常に嫌な機能が軍事力に出てきてしまった。

そのために、シェリングの言う”diplomacy of violence”であるが、「暴力による外交」の可能性が高まった。かつては苦痛を与えるのは、マゾヒストの指導者とか軍人ならともかく、まともな軍人や国にとってはあまり意味がなかった。なぜなら、強い者は勝てばよかったわけであるし、弱い側は悔しくても何もできなかったもので、戦争の勝ち負けに関係なくただ単に苦痛を与えるなどと考えるのはあまり意味がなかったわけであるが、現在の北朝鮮のような国は戦争には絶対勝てないが恐らく静かには死なない。北朝鮮の気持ち次第では、アメリカ及びその同盟国・友好国がひどい目に遭うということが起きている。相手に苦痛を与える機能を、外交での駆け引きの道具として駆使することをシェリングは **diplomacy of violence** と言ったが、要するに **power to hurt** というものは **bargaining power** になるのだということである。相手に、痛い目を見たくないなら言うことを聞け、譲歩しろ、という外交である。あるいは外交と言う日本語だと少し色が着くので、駆け引きと言ったほうがよいかもしれない。相手が要するに何を欲しがっているか、何を怖がっているかというのに働き掛けて、相手の気持ちを変えさせて、本当だったらしないようなことをさせるわけであるから、まさに交渉の一種なわけである。

ここで重要なのが、資料 P1 の下に書いたように、“... the power to hurt is typically not reduced by the enemy's power to hurt in return. Opposing strength may cancel each other, pain and grief do not.” 力と力で勝ち負けを争うときは、相手が強いのに対して自分がより強くなれば、それをキャンセルできた。ところが、苦痛を与える機能はどうか。北朝鮮のような国が、「あまり俺を怒らせると、俺はただでは死なない」とか「ソウルは火の海だ」とか、「日本列島は沈みアメリカに核の灰が降り注ぐ」というようなことを言うと、我々は、「おまえだってただじゃ済まない」と言って抑止しようとするわけであるが、北朝鮮がただで済まなかったら日本が苦しい思いをしないで済むのかというと、そういうことは全くない。戦争の場合は、相手が強くなったつもりでいても、こちらがよりすぐれた軍事力を持てば、相手は何もできない状態ができる。しかし、「北朝鮮はやくご国家」と言った先生がいるが、特にこの苦痛を与えることについては、「苦しみ上等だ、その代りお前も苦痛を味わうんだぞ」と言って開き直るわけで、そうなったときに実はあまり手の打ちようがないわけである。かつては、戦場では人が死んだり傷ついてひどいことがあったけれども、銃後の大事な国土、あるいはそこにいる一般のシビリアン、産業、そういうものを傷つけるためにはまず勝たなければいけなかったのであるが、今はミサイルや飛行機を持っていれば勝たなくてもできてしまう。ましてや、核兵器のような大量破壊兵器をそれに積み重ねば、さらにひどいことが容易にできるというところがあるので、大変困った状態だということである。

だから昔は、資料 P2 ページに引用したように、**assurance of the victory** 要するに絶対勝てるという確信があれば、国のリーダーは時には戦争をしようと思ったし、**enthusiastic about**、要するにそれで行くしかないというように熱心だった。ところが、今はそうではない。圧倒的に強いアメリカも北朝鮮にうかつに手を出したくない。トランプがいろいろ言

っているが、やはりうかつに手を出せないという状況が成立してしまっているわけである。

これが我々にどういう影響を及ぼすかをこれから述べていくわけであるが、まず抑止と今申し上げた暴力による外交との関連では、抑止というのは 3 つの主な要件があつて初めて成立すると言われていて、それは第 1 に、抑止しようと思う国、例えばアメリカに十分な報復能力があること、相手が攻撃した場合に報復できる能力があること。それから第 2 に、相手が攻撃してきた場合に報復を実行する意思があること。そして最後に、相手が合理的であることで、相手がクレイジーであつたら、抑止もへったくれもなくなるわけである。問題は、相手国が攻撃した場合に報復を実行する意思というところに、暴力による外交が容易になってきたことで影響が及んできているということである。

この話をする前に、もう一つ基礎概念を申し上げると、抑止には基本抑止 **basic deterrence** と、拡大抑止 **extended deterrence** が区別される。基本抑止というのは自分の国への攻撃を抑止することであり、拡大抑止というのは主に同盟国だが、自分以外の第三国への攻撃を抑止するということである。抑止の要件の 2 番目に挙げた報復を実行する意思というのが大事で、抑止では、要するに「変なことをしたらただじゃおかないぞ」と言うわけであるが、「ただじゃおかないぞ」という脅しが本当に信憑性があるものかどうかという問題が常に付きまとう。そして、この問題は抑止よりも拡大抑止のときに特に深刻である。というのは、自分がやられたら、常識的に考えてそれを受け入れるというか黙認してしまうことはあり得ない。ところが、自分がやられていなくて、よその国だけやられたという場合はどうかということがあるわけである。特に敵に自分の国に対しても苦痛を与える能力が備わっている場合に、それは特に深刻な問題になる。冷戦期によく言われたのは、ド・ゴールの言葉で、「アメリカの指導者はパリを守るためにニューヨークを危険にさらすだろうか」と。つまり米国自身の都市、たとえばロサンゼルスが、あるいはオクラホマシティがソ連の核攻撃を受けて何百万人の人が死亡したとすれば、それに報復するとまたソ連が報復してくるかもしれないとしても、その場合アメリカの大統領は恐らく手を出さずに黙っていることは政治的にもできない。ところが、パリがやられたが、アメリカは無傷だというときにアメリカが報復をする、そうするとソ連が今度はアメリカに報復してくるかもしれない、それを一体アメリカがするだろうかという話である。

ちなみにこのド・ゴールの言葉は、日本語、英語、フランス語で Google 検索したり、いろいろな本でも調べてみたがはっきりとは出てこないという不思議な言葉であり、どうもこれらしいことを言つたらしいが、どこかでスペシフィックにそういう発言をしたわけではないらしい。いずれにしても、ド・ゴールは、「だからフランスは自分で核を持つ」と言つたわけであるが、冷戦時代を通じてヨーロッパではこの問題が極めて深刻に議論された。どうやったらアメリカがいざというときに報復をきちんとしてくれるのだろう、それをどうやったら確実にできるのだろうと。そのために冷戦期欧州では、米国の報復を事実上自動的にできないかというのでいろいろな工夫をして、「トリップワイヤー」と言つて、敵が攻めてくるとアメリカがある種の被害を受けるので自然にインボルブされざるを得ないよ

うな仕組みを作るとか、あるいは「ニュークリア・シェアリング」と言って——これは単純な核のボタンの「共有」とは少し違うのだが——そういうことをしたらどうかとか、いろいろなことを考えたわけであるが、日本ではそういう動きは見られなかった。なぜならば、ソ連が日本だけを核攻撃するというのは事実上あり得ないと考えられていたからである。というのは、ソ連の目から見てそのようなことをしても何の得も考えられないので、蓋然性が低かったわけである。日本がもし核攻撃されるとすれば、米ソ核戦争が起こった中で起こることであり、そのときはアメリカ自身が戦争をしているわけであるので、拡大抑止の信憑性の問題は起こらない。

ところが、冷戦後になって北朝鮮の核ミサイル能力が高まってきた。実は中国の能力が高まってきたこともこれに関係があるが、ここでは話が複雑になるので中国の話はしない。北朝鮮の核ミサイル能力が高まったことで、日本だけが何らかの、本当だったらアメリカが核で報復するはずの攻撃を受ける。核攻撃が特にそうであるが、そういう可能性が深刻な現実的なものとなりつつあるということである。

(資料 P2 ページに)「軍事的に弱小な北朝鮮」と書いたが、北朝鮮は核とミサイルでは大変優秀である。核兵器をあれだけ造るし、韓国はロケット(弾道ミサイルと技術的には同じと考えてよい)が打ち上げられなくて四苦八苦して、ようやく 1 回だけ打ち上げに成功したが、ロシアの技術を借りてやっているから自前ではない。それを北朝鮮は続けざまに発射して何度も成功しているわけであるから大したものである。だが、全体的に見ると、先ほど申し上げたように韓国と戦争しても、アメリカと戦争しても絶対に勝てない。「弱小」と言うとき少し言い過ぎだが、相対的には弱い国である。その相対的に弱い国が韓国やアメリカをなぜ抑止できるのかということは、既に申し上げたことと重なるが、ここをきちんと抑えていない議論が結構多いような気がするので念のため申し上げますと、まず北朝鮮は韓国に対して暴力による外交を有効に実施できるわけである。「ソウルを火の海」は残念ながらはったりではないわけである。というのは、ソウルから 38 度線までは一番近いところで測ると 30 キロだという話もあるが、40 キロぐらい。そうすると、東京駅から八王子駅までの直線距離ぐらいの近さなので核や弾道ミサイルなど要らない。ほかの通常兵器でも北朝鮮は韓国、特にソウルに甚大な被害を及ぼし得る。何度も言うように、だからといって北朝鮮が戦争に勝てるということはあるわけであるが、大変な苦痛を与えることは容易にできてしまう。例えば戦車が 38 度線を越えて来るとあの辺には地雷がたくさん埋められているので、戦車は吹き飛ぶが、「自爆精神」が北朝鮮の軍のスローガンになっているから次々に突っ込んで来る。ソウルまで 40 キロであるから、あっという間に来ってしまう。普通のミサイルを撃てば簡単に届いてしまう。ソウルと平壤も実は 200~300 キロぐらいしかないから、東京-名古屋よりも近いか同じぐらいの状況である。

我々が特に心配しなければいけないことはアメリカに対して北朝鮮の暴力による外交の可能性が高まりつつあることである。というのは、日本はアメリカのアジア太平洋で一番重要な同盟国であるとトランプも認めているわけであるが、日本は既に北朝鮮の弾道ミサ

イルの射程に入っている。それはどういうことかという、在韓米軍基地に加えて在日米軍基地も北朝鮮の攻撃を受ける可能性がある、グアムも射程に入りつつあるということである。最近の北朝鮮の主張によると、太平洋軍司令部のあるハワイ、それからアラスカも射程に入りつつあるということである。ICBM、SLBM でアメリカ本土が射程に入る。北朝鮮はアメリカに勝てないかもしれないが、「おまえ、俺が何するか分かっているんだろうな」と言って開き直る変な脅威が高まりつつある。

先ほど申し上げたように、それでも、北朝鮮がアメリカを攻撃してしまったらどうなるかという、これは誰がアメリカの大統領であったとしても、さらに北朝鮮がまだ（報復に使える）ミサイルを持っていると思われたとしても、報復核攻撃を行わないことは考えられない。そのようなことをしたら国民の支持をたちまち失って暴動が起きるだろうという話になる。

ところが、アメリカが北朝鮮の核ミサイルの射程に入ったことが分かった後に、例えば日本が小規模な核攻撃を受けたらどうなるかというような話が、だんだん我々の前に気持ち悪い仮定の話として入ってきてつつある。大規模な核攻撃とか、大規模なミサイル攻撃だったら多分アメリカは反撃せざるを得ない。それを見て見ぬふりをしたら、世界でアメリカの信用は地に落ちる。ただ、どこかの小さい島に 1 発落ちて 200 人死んだとか、そういう話のときに一体どうか。私が 2 年前に出たある日米の会議でも、そういう話をオフレコでしていたら、アメリカで重要な地位に就いていた人が、「報復しないのではないか」と言うので、「そういうことをあなたが言うと大変だから黙っていてほしい」と言ったら、「off the record だから」と言って笑っていた。それは半分冗談だったのだが、彼は要するに日米同盟を真面目に考えているので、彼自身は報復したほうが良いと思っているが、報復しないほうが良いという意見が出ることは大いに考えられるということをおうとしたのである。北朝鮮が、アメリカが報復すれば「わが核兵器がアメリカに降り注ぐ」と言って脅かすという状態で、果たしてアメリカがどこまで手を出すか分からない、というわけである。トランプは「100%」と 2 月 11 日にマラーゴで言ったわけである。こういう発言をアメリカの大統領がすることは、対北朝鮮抑止を強化するために非常に重要なわけである。ただし、レトリックだけではやはり抑止は強化されない。ましてや、アメリカ本土が本当に北朝鮮の核の射程に入った場合に、トランプが大統領でいる間に射程に入るとも思えないが、いくらトランプが「100%」と言ったからといって、アメリカ大統領が拡大抑止の信憑性問題を解決することはできないわけである。

さらに北朝鮮の脅かしを真面目に考えざるを得ないものになっている理由に「瀬戸際戦術」というものがある。この言葉の正確な意味を説明しておきたいと思う。英語では **brinkmanship** と言うが、これをシェリングは **manipulating the shared risk of war** と説明した。**shared risk of war** ということは肝心で、争っている 2 カ国が戦争のリスクを共有していてどちらにも戦争のリスクがあるときに、そのリスクを片方の国が操作することによって相手から譲歩を勝ち取ろうとするということである。

資料のその次に書いてあるのが (P3 ページ)、シェリング自身の定義で、It means exploiting the danger that somebody may inadvertently go over the brink, dragging the other with him.要するに、A と B という 2 人が争っているときに、A が B と体をロープで結んで滑り落ちるリスクのある坂に B を引きずっていく。いくら気を付けていても落ちるリスクがあるというところが肝心で、B 対して A が「俺がうっかり落ちるとおまえも落ちるぞ、いつそうなるか分からないぞ、嫌なら譲歩しろ」と迫るのが **brinkmanship** 瀬戸際戦術である。A がいくら気を付けていても、そこにいる限りは意図せずして滑り落ちるリスクがあるという点に眼目がある。ちなみにシェリングは A に **anticipated irrationality** がある場合についても言及していて、要するに B の目から見て A に時々あいつはむちゃなことをするやつだという認識があったら、やはり瀬戸際戦術は成り立つ。慎重にげけに近づいて「どうだ、落ちたくないだろう」と言っても、A のほうだって落ちたくないわけであるから、**anticipated irrationality** というのは A というのは時々そういうことを見境なくするという認識だが、それがなかった場合には、A がいくらげけに近寄って行っても、それほど B は困らない。ところが、滑りやすい坂の上に立っていて、滑るとただでは済まない時に、A はそのリスクを自分も取りつつ、「だが、危ないのは俺だけではない、おまえも危ないんだぞ」と迫る。その時に A に **anticipated irrationality** があると B はいっそう困る。これが瀬戸際戦術で、北朝鮮がやっていることである。北朝鮮が何を考えているか分からないが、このように考えて、この言葉が使われるわけである。単にリスクを高めるというのではない。自分にもリスクがあり、自分も嫌なのだが、相手も嫌だというリスクがあり、そのリスクを自分もあえて甘んじることによって相手をびびらせる。その際に、自分でもコントロールできない要因によってリスクが現実になってしまう可能性がある。

そういうことが北朝鮮に実際に行われているかどうか考えたら、思っていたよりもやっているような気がしてきた。というのは、けさもそうだが、弾道ミサイル実験であるが、これで **shared risk of war** を **manipulate** している可能性があるかもしれない。最近では 3 月 6 日に北朝鮮のミサイル 3 発が日本の **EEZ** に落下した。その **EEZ** はイカ釣り船など日本の多くの漁船が出漁する漁場だった。もちろんそう簡単に当たらないが、もしも当たったときには人が死ぬ。そうしたらアメリカや日本も恐らく報復せざるを得なくなって、そこからエスカレートしていくと本当は誰も望まない戦争、**inadvertent war** になる可能性がある。最近まで私自身はそこまでは考えていなくて、文在寅が当選した直後の毎日新聞に談話を文章化した記事を書いたが、そこでは今の話について、万一被害が出ていたらどうなったのか、北はその危険度を認識していたのだろうかとか偶発戦争のリスクに懸念を表明したのであったが、今回考えてみると、もしかすると偶発戦争の危険は認識した上で、アメリカや日本にもそうなったら困るだろうと迫ろうとしている、要するに瀬戸際戦術で来ている可能性もあるかもしれない。北の弾道ミサイルが日本の **EEZ** に着水したのは去年 2 回とけさを含めて 4 回であるが、いずれもひよっとするとという感じもなくはない (資料 P3)。

それから、北朝鮮は最近レトリックのレベルでもどう喝がひどい。アメリカ、韓国、日本を攻撃するというあからさまなどう喝。「ソウルを火の海」というのは 20 年間言うていくことであるが、最近アメリカにまでそれを言うようになった。最近、面白いと言うては少し語弊があるが、すごかったのが 4 月 21 日の北朝鮮が勝手に作っているアジア太平洋平和委員会という韓国との窓口組織の報道官声明である。NHK と UPI で報道があり、資料 P4 の②は UPI の記事をベースに訳したものであるが、「水爆から大陸間弾道ミサイルまですべてを持つわれわれは、米国のいかなる挑発にも対応する準備がある」、これはよいが、「われわれの首脳部と生活と尊厳を脅かす敵対勢力は、南が灰となり、日本列島が沈没し、米国本土に核が降り注いだとしても後悔してはならない」。米国本土にというあたり正気の沙汰とは思えないわけであるが、これもわざと正気の沙汰ではないと見せ、**shared risk of war** を高めることによってアメリカや日本そして韓国を **intimidate** しようとしている試みと見られないこともない。これは実はなかなか難しい問題を我々に突き付けていて、抑止の観点からはやはり相手の行動に合わせて当方の行動も調節して、相手がきついことをやってきたら、こっちもきついことで返す必要がある。だから、実は日本の EEZ にこうやって繰り返しミサイルが着弾している状況で今までどおりのことをしたり、「最も厳しい言葉で抗議」と菅官房長官が言っていたが、そのようなことを言っているだけでは駄目で、最近、私がある日米の会議で、そういうことがあったときは、北朝鮮の EEZ の中でも「何らかの爆発」が起きるような事態が起らないといけないかもしれないと言ったら、皆真面目に聞いていた。

ただ、それはこちらの行動も **shared risk of war** を高めるので、北朝鮮がそれでびびって改めて抑止されてくれればよいが、そうではなくてさらに変なことをしてくるリスクが高まるという意味でなかなか苦しい。ただ、何もしないでいると、やはり抑止は弱まるということである。

トランプ政権は「戦略的忍耐 (**strategic patience**) は終わった」と言っている。戦略的忍耐というのは、北朝鮮が核の問題で歩み寄ってこない限りは対話をしないというオバマ政権の政策で、これは実は私の 20 年来の主張と一致するので戦略的忍耐には私は賛成である。それはさておき、トランプ政権は、「あらゆるオプションがテーブルの上にある」、「中国がやらなければ我々が解決する」となかなか勇ましいわけであるが、これは単に勇ましいのではなく、北朝鮮のミサイルがいよいよアメリカ本土それも東海岸にまで届くということを目に受け止めている証拠である。だから、勇ましさをそれ自体をそれほど非難することはないわけで、安倍首相はこれを評価すると言って 27 日のイタリアでのサミットの後の記者会見でも、「すべての選択肢がテーブルの上にあるとのトランプ大統領の強いコミットメントを日本は高く評価する」と述べた。

ただし、ここにジレンマがあるのは、アメリカにとって北が軍事力を行使するとアメリカにも相当の苦痛が及ぶことである。アメリカに対する抑止を強化するには、アメリカの北に対する武力行使の可能性を示す必要があることは間違いないが、何しろそれをもし実

行したときに北朝鮮がアメリカに与える苦痛が大きくなりつつあるので、脅しの信憑性を高めることが容易でない。

日本にとっては、北朝鮮に対する拡大抑止の強化のためには、アメリカが北に対する武力行使があり得ると言ってくれることが重要だが、万一そういう武力行使が行われると、日本はノドンの射程に入っているので、無傷でいられる保証がないというジレンマもある。

こう言うとお先真っ暗のようであるが、北朝鮮は抑止が効きやすい国だということは同時に認識する必要がある。20年ほど前に私は北朝鮮の行動について次のような分析をして、吉崎主査に大変褒められたが、それは、北朝鮮は生存を望んで自殺行為はしない、成果の見込めない武力行使はしない、成果が見込めると武力を使う可能性がある、意思決定は経済合理性にのみ従っているわけではない、国際合意は守ると限らない、善意に基づく互惠精神は期待できない、力の論理、軍事力の論理には敏感に反応する、いずれ核もミサイルも保有する可能性が高い、国力のあらゆる指標から見て弱小国である、日朝関係が改善すると北朝鮮には大きな利益がある、日本には日朝関係を改善しなければならぬ切実な理由はない、というものである。私は、特に今日の問題との関係で言うと、北朝鮮はいずれ弾道ミサイルも核兵器も持つ可能性が高いが、北朝鮮は生存を望んでいて、建国以来歴史の中で自殺行為をしたことがなく、軍事の論理に非常に敏感で抑止が効きやすい、だから、1999年の時点で、将来核や弾道ミサイルを持った北朝鮮が出現すると気持ち悪いが、慌てずに日米同盟を基本に——今だと韓国とも協力してということになるが——抑止を強化すべきだと主張したわけである（資料 P5）。

金正恩あるいは父親の金正日を見れば、あの人たちが自殺をする人でないことは明らかに分かる。おいしい物を食べてあれだけ太っていて、西側の映画やビデオを愛好し、美女を集めているわけである。要するに非常に俗っぽい現世的な娯楽、楽しみ、それを味わい尽くそうという人たちである。ああいう独裁者が主義主張のために自殺をするとは思えない。ましてや、個人崇拜を作り上げて喜んでいるわけであり、そう簡単にチュチェ思想のために死ぬとは思えない。私の意見は今も変わっていないで、核・ミサイルを持った北朝鮮は大変不愉快で、その行動は危険極まりないのだが、抑止は効くので、あまり慌てることはないと思っている。先ほど最初に申し上げたのはそこであり、少し騒ぎ過ぎのような気がする。特にけさのNHK。あれほどニュースで延々とやる必要があるのか。6時半ごろから朝の連続テレビ小説の直前まで半分以上の時間をあれに割いていたが、同じことばかり言っていた。騒げば騒ぐほど北朝鮮は自分たちの脅かしに効果があったと思う可能性もあるので、厳しい態度を取りつつ、慌てず騒がずというのがいいような気がする。

この話の延長線上でもう一つよく議論に出るのが、中国の協力という話である。中国との協力がどこまで得られるかが、北の核問題あるいはミサイル問題の解決・緩和に非常に大きなポイントになる。中国も今までよりはアメリカ、日本、韓国との協力を重視するようになってきている。というのは、北朝鮮の度重なる挑発行動にいら立っているからである。先日の一帯一路の大会議の朝にミサイルを発射されてメンツをつぶされかなり怒って

いるはずである。もっと実際的なことを言うと、北朝鮮があのようなことを繰り返すことがアメリカや日本・韓国の安全保障政策にどういう影響を及ぼしているかを考えると、中国としてはやはりいら立たざるを得ない。トランプ政権が空母を 3 隻目も派遣してきているとか、日本で敵基地攻撃能力などというものが改めて語られたり、安倍内閣の人气が相変わらず高いのも、一つにはこういうことが影響しているかもしれない。韓国もせっかく文在寅が出てきて、「北朝鮮と対話」だとか、「THAAD については中国とも話し合う」とか言っていたのが、このタイミングでそのようなことを言ったら世論が納得しないし、文在寅ですら厳しい態度で行かざるを得ないし、THAAD の問題などもとりあえず出せないだろうということで、中国も従来よりはアメリカと日本と韓国との協力を重視するようになってきた。しかし、見逃されがちなのは、中国の対北朝鮮の脅威認識と日米韓の脅威認識は程度も内容も大きく異なるということである。日本、韓国は北の核や弾道ミサイルを自分にとっての深刻な脅威だと思っている。韓国にとっては核や弾道ミサイルがなくてももう十分脅威があるが、しかし、核や弾道ミサイルも追加的に深刻だと思っている。核や弾道ミサイルがなければ日本は安全地帯だったわけであるが、そうではなくなってきている。そしてアメリカも、だんだん自分のところにも脅威が及ぶと思って深刻になりつつあるときに、中国は北の核やミサイルが自分に向けられるとはまだ思っていない。だから弾道ミサイル発射、核実験があつて、非難もするようになったが、相変わらず関係国に自制を求めるなどということを行うわけである（資料 P5）。

アメリカ・韓国が THAAD 配備で合意するのも、日本の北朝鮮への攻撃能力の議論を始めるのも、北朝鮮が悪いのだが、中国がそういう日本、韓国、アメリカの動きに対して苦情を言うのを見ると、中国にあまり大きく期待し過ぎるのは間違いと言っているのではないかと思う。もし北朝鮮がつぶれて韓国主導の統一となってしまうと、鴨緑江の向こうにアメリカに近いリベラルデモクラティックな国ができるわけで、それはやはり中国として避けたいことだろうということもある。

では、韓国はどうか。日米プラス韓国プラス中国という話がしきりにされるわけであるが、北朝鮮が文在寅就任直後からまたミサイルを撃っているのも、今のところは彼が変なことをする可能性がとりあえず少し下がっているわけであるが、選挙戦中は「北朝鮮には融和だ」と言ったり、THAAD 配備については大統領就任直後に「アメリカと中国と話し合う」と言って、見直しする可能性がかなり強く示唆されたりしていた。万が一文在寅が北朝鮮と融和したり、あるいは THAAD を見直ししたりしたら、これは日本もアメリカも韓国に対して大変な不信感を抱くことになり、そうなるといくら北の脅威が深刻だといっても、日米韓協力が果たしてできるのかということになってきかねないわけである。日本の場合、ましてや例の日韓合意に対する韓国の対応で、国際合意すら守らない国と一体協力できるのかと一般の人まで言うようになってきていて、韓国人にこのことを言うと結構驚いていた。これがもう一段強まったりすると、本当に韓国はどうでもよくなりかねない。アメリカも、もし THAAD の見直しなどと本気で文在寅が言い出すと、同じように

韓国よりも日本だという姿勢をより一層取る可能性がある。

恐らく中国も韓国の姿勢の変化にいら立っている。朴槿恵は見る影もなくなってしまったが、2015年9月3日に天安門広場でパレードをやったときは、習近平、プーチン、朴槿恵と並んで、それに対して韓国人にも拍手喝采していた人が多かったわけである。それがわずか数カ月後にはアメリカに寄って行って THAAD である。もちろん中国が韓国に北朝鮮問題で期待どおりの行動を取らなかったのが良くなかったという理屈はあるが、それにしてもあまりにも手のひらを返したように態度が変わる。私は中国人の気持ちも分かるような気がするので韓国での「韓中日」の会議それを言ったところ、それに対しては中国人から一切反論が出なかった。北を抑止するのに日米同盟が基盤であるが、中国や韓国の協力が必要で、できれば日米韓中、それにロシアも、と安倍総理はサミット後の記者会見で言っていたが、そのほうがよいのだが、それを阻むような要因がある。

先ほど日本がもはや安全地帯ではないと申し上げたが、これがやはり朝鮮半島有事をめぐる日本を取り巻く地政戦略的な図式の変化として一番深刻なものであろう。これまでの話と重複するところもあるが、改めて少し整理しておく、まず朝鮮半島を見ても分かるように、韓国人の専門家でもよくわかっていない人が多いが、朝鮮半島の安全保障情勢にとって日本そして在日米軍の戦略的意味は極めて大きい。今ではそれに対する日本の自衛隊による支援の意味も大変大きい。従来は、仮に朝鮮半島で有事になっても、戦闘は半島に限定されて日本には直接戦闘が及ばないと見ることができたので、アメリカは日本を「安全なステージングエリア」、すなわち中継地のようなものとして見ることができて、日本は心配なくアメリカを支援できた。それが朝鮮半島有事の地政学戦略的基本構造だったわけであるが、今や北朝鮮が日本を攻撃する可能性が出てきている。朝鮮半島有事となったときに、日本に対して場合によると核使用も含めた攻撃の脅迫やミサイルによる攻撃の脅迫を行って、アメリカを支援するなど要求・脅迫してくる可能性が現実味を帯びてきている。日本がアメリカを支援することについて、日本ではこれまでそのリスクがあまり深刻に論じられてこなかった。それがやはり深刻な問題として浮かび上がってきている。だから一層アメリカの拡大抑止の信頼性の強化が不可欠になるわけである。

アメリカの対日拡大抑止へのコミットメントは実は強化されつつあり、その意味では安心できるところがある。例えば宣言政策つまりレトリックでわが国はこういう政策を取るというレベルの話で言うと、北朝鮮の最初の核実験から 11 年近いわけであるが、2006 年 10 月の最初の実験の翌年の 2007 年 5 月 1 日の日米 2 プラス 2 の共同声明を皮切りに以降の日米間の重要な文書では、アメリカが日本に対して核による拡大抑止のコミットメントを確認するという文言がずっと出ている。2017 年 2 月のトランプ政権下で初めての安倍総理との首脳会談の共同声明でもそれが引き継がれた。日本側でも防衛政策の基本文書、例えば 2010 年版以降の防衛大綱、2013 年の初めての国家安全保障戦略などに、核を中心とするアメリカの拡大抑止が日本にとって不可欠である、信頼性の維持・強化のためにアメリカとの協力を密にしていくというようなことが明記されるようになっていく。日米バイ

ラテラルレベルで言うと、2015年の新ガイドラインに米軍の打撃力の使用を伴う作戦に関する日米協力の強化による拡大抑止の信頼性の向上という方向性が出されている。だから、日米が宣言政策レベルで拡大抑止の信頼性向上という方向に動いているということは間違いない。

宣言政策というのは言葉のレベルの話であるが、実際に軍事力の態勢がどうなっているか、安全保障態勢がどうなっているかを見ても取り組みが進んでいて、例えば2010年以降年2回ずつ日米は、拡大抑止協議と言って、この問題を専ら話し合う場を結構高級な官僚レベルで設けている。それから、新ガイドラインとか、日本での新安保法制も、同盟の抑止力強化のための取り組みという意味が非常に大きい。だから、それを実行していかないといけないわけである。ただし、今や北朝鮮が日本を攻撃できるようになってきていて、核攻撃さえ現実味を帯びつつあるわけである。そうすると抑止力の信頼性を高めるだけでは十分でないかもしれない。今日の話の中で今まで抑止と言ってきたのは、抑止にも種類があるが、抑止の中の典型である **deterrence by punishment** 懲罰的抑止のことである。これは、「おまえが俺が望まない変なことをしたら、おまえはただではいられないんだぞ、すごい罰を受けるんだぞ」と言って、その脅かしによって相手を抑止する、というものである。これが一番普通の抑止のイメージだと思う。

ただ、それだと、万が一北朝鮮が「もうやけくそだ」と言ったり、あるいは間違えてミサイルが飛んできてしまったときに、実はお手上げである。そのときに仮に抑止の信頼性が保たれてアメリカはきちんと懲罰してくれたら、めでたいとなるかという、全然めでたくない。北のミサイルはいきなり東京にはこないと思うが、名古屋と富山あたりは結構危ないかもしれない。富山は吉崎主査の出身地で恐縮だが。そうすると、実際に攻撃を受けてしまった後で報復してもらったとしても全然めでたくないわけである。北朝鮮の核ミサイルが発射されないように、被弾を物理的に阻止するための手段を尽くすことも今まで以上に真剣に考えなければならなくなっているのではないか。例えばミサイル防衛 MD などをもっと進歩させるとかである。あるいは敵基地攻撃能力というのもそれである。これも抑止強化につながる。それは拒否的抑止 **deterrence by denial** と言うが、拒否力とは何かというと、相手が自分に何か嫌なことをしようとしているときに、相手が何かをしても、その嫌なことをするという相手の目的を達成できない状態を作ることである。要するにおまえは俺のところを侵略しようとしているようだが、そう簡単に侵略できないぞというのが拒否力で、冷戦期の自衛隊の役目が、今でもそうかもしれないが、よく拒否力という言葉で表された。ソ連が北海道に侵攻してきても、容易なことでは負けない。ソ連の北海道侵攻計画の成功を拒否している、その間にアメリカが駆け付けてくれるという話だったわけであるが、北朝鮮がミサイルを撃っても、それが相当の確率で打ち落とされるとか、あるいは北朝鮮がそもそも撃とうとしていることがはっきりした段階で攻撃できるということになれば、それを北朝鮮が知れば、やはりできないことをしようとして損害を被るのはばかばかしいので、これも抑止になるというので、そういう方面のことも少し考

えていかないといけないかもしれないというのが、今日本が置かれている状況かと思う。

若干の追加をすると、日本には今までの話と違う意味でのリスクも生じつつある。その一つが、話し合いによる外交的解決の盲信とでも言うべきものである。アメリカや韓国をはじめ国際社会が、北朝鮮の核弾道ミサイル問題は外交で解決すべきだと言いやすくなっている。最近ローマ法王もそのようなことを言われたそうであるが、やめてもらいたいと思うわけである。国際社会だけではなく日本国内でもやはり軍事力嫌いがあるので、こういう意見にすぐ賛同する人がいるが、ミサイルの話もそうだが、それ以外にも拉致問題や、あるいは国交正常化のために北朝鮮とさんざん交渉して、こちらからいろいろな援助等を与えて、北朝鮮もやがて分かるだろうと思ったら全然分からない。つまり善意に基づく互恵の精神は期待できないという経験が日本にはある。要するに北朝鮮と普通の意味での外交とか交渉をしてもほぼ無駄であるという教訓を日本は得ているわけで、それをやはり国際社会に、あるいは日本人自身に説いていく必要があると思う。

ティラーソンやトランプは、対話より圧力という姿勢を示すようになってきているが、ただ、ワシントンには実はトランプ勝利の後、専門家などを中心に、戦略的忍耐は失敗した、つまり相手が歩み寄って譲歩してこなければ話し合わないというのは失敗した、もっと話し合えという人が多い。だから私は、ティラーソンが「戦略的忍耐は失敗した」と言ったときに、実は心配していたわけである。下手にトランプが話し合いに動いてしまうとよくない。幸い今はそういうことはないようであるが、トランプは詳しいことが分かっていないので何をするか分からない。

中国は、いら立ちは強めているが、依然として話し合いでということはい言いつけていて、特に 9 年ぐらい止まっている六カ国協議に依然として希望を持っている。六カ国協議というのは、南北朝鮮にアメリカ、中国、日本にロシアを加えて北朝鮮の核問題を話し合う場ということになっているが、北朝鮮がそっぽを向いたので止まっているわけで成功の見通しはない。これまで日本が学んだ教訓と言えるが、日本のみならず国際社会が北朝鮮との協議の場でどういうパターンを経験してきたか、ずっと言っているのだが、4つの段階からなる周期的パターンだと私は思っている。まず瀬戸際戦術で北朝鮮が危機状況を作る、日本やアメリカ、韓国などに圧力を掛ける、核計画にブレーキを掛けてほしければ見返りをよこせと言う、これが第 1 段階。これに対して関係諸国が見返りをやるというのが第 2 段階。ところが、すぐに合意無視が明らかになってくる第 3 段階。第 4 段階になるとまた新たな危機が作り出され、対話のテーブルに戻ることを交渉材料にもっと見返りをよこせと北朝鮮が言い出す。

これを私は金正日のころからずっと言っているが、金正恩が出てきたときに、朝鮮半島の専門家の人には、こういうパターンが崩れるチャンスだというようなことを言う人がいたが、私はそのようなことはないところかの新聞に書いた覚えがあり、私だけが当たっていたと思っている。金正日が死んですぐの 2012 年 2 月 29 日に米朝合意が世界を驚かせた。北朝鮮が核やミサイルの話を決凍結する代わりにアメリカは援助をやるという話で、このと

きは私も、私の予想が外れたのかと一瞬思ったが、半月後に北朝鮮は人工衛星を登載したロケットと称するミサイルの発射を予告し、実際に4月13日に発射してしまった。全くパターンは崩れていないわけであり、日本としては国際社会に、こういう現実・教訓があるのだということをリマインドしていかないと、皆が話し合いというものに過去を忘れて突き進んだりすると、これは日本にとって別の意味の悪夢 **nightmare** シナリオになる。

最後に、もう一つリスクがある。それはトランプが北朝鮮問題を非常に重視する中で、中国の問題を棚上げにする恐れがありはしないかということである。中国が圧力強化に加わる、それをトランプはそれなりに評価している、「習近平は立派だ」と言っている。安倍首相も「中露の協力が必要だ」と今度のサミットの後の記者会見で言っているのも、それほど政策の方向性に日米で齟齬はないが、しかし、北朝鮮に熱心になり過ぎて中国も実は我々にとってチャレンジだと言う。特に自由で開かれたルールズベースドの秩序を脅かしている、動揺させているという点を見過すと、日本にとっては別のリスクということになる。これも、「航行の自由作戦」をトランプが止めたというような報道があり、かなり心配していたところ、「航行の自由作戦」は実行されたのでよく分からないが、たびたびこの委員会でも出たように、トランプは秩序とかルールについての意識が極めて低く、そういうものが自分の国の国益にどう関わってくるかについて理解があまりない人であるから、うっかりすると中国は良い国だということになりかねなくて、それは長期的に非常に深刻なことになりかねない。ついでに言うとも日本もそこは考えるべきで、最近北朝鮮ばかりを言い過ぎているのではないかという気もしなくはない。やや心配な話としては、ゴールデンウィークに中谷氏や小野寺氏といった防衛大臣経験者等を含む有力な政治家数名がワシントンに行ったが、その際にあるアメリカの専門家が、その政治家たちのリマークの中で中国はほとんど出てこないで北朝鮮が専らだったので、「中国は二の次になったのか」と聞いたら、中谷氏も小野寺氏も「そうだ」と言ったという。それはまた困ったことで、「そうだ」というのは言葉のあやだとは思いますが、やはり我々としては長期的には中国の問題が重い、だが、短期的に北朝鮮は今までとは比べものにならない難しい問題を我々に突き付けている、ただし、最後に抑止は効くというところで、慌てず騒がずバランスの取れた見方をしていかなければいけないのではないかと思う。以上である（資料 P6～8）。